

## 令和 6 年度終業式 講話

1 年間を振り返る、終業式となりました。学校というところは今日の日のように、「節目」を感じられる季節感があります。社会人になると、なかなかこういう節目というものを感じられることが少なくなり、慌ただしく 1 年を過ごすことが多い中、私たち教員のように、小さい頃から「学校」という場所に身を置いている人間からすると、「学校ってところは節目があつていいな」とあらためて思うところです。

さて、皆さんにとって令和 6 年度はどんな年になりましたか？少し前の混沌とした時期からは変化し、皆さんが思う存分活動できる社会が戻ってきたことを嬉しく思うと同時に、コロナ前と変化したのは、時代は「探究」なくして語れなくなったこと、そしてその背景には学校現場での ICT 活用、AI の劇的進化、DX の飛躍的前進があげられます。また大学入試制度も変化し、総合型選抜の利用により「自分」が何者なのかを、自分自身で問い続ける姿勢、つまり「探究し続ける自分」これが重要になりました。皆さんに必要な力をつけてもらうべく、学校も変化し続けなくてはいけないことを、今年も痛感した 1 年でした

変化が大きい世の中ですが、ここ 2 年ほど、私自身が向き合っている課題が「伝統を繋ぐ」ということです。例えば、この蟻ヶ崎高校。120年以上流れた時間の中で、過去から現在そして未来へと、美しい時間が変わらず流れていくんだろうな と感じる瞬間が何度もありました。よく皆さんにも伝えていますが、私は蟻ヶ崎高校の皆さんは、とにかく「美しい」と感じています。立ち居振る舞い、挨拶、人との温かい接し方、礼節を重んじること、服装や言動・行動の乱れがないこと。これは流れ続けている「伝統」なのだろうと考えます。この「皆さんの美しさ」こそ、地域から信頼され、長野県で最も受験志願者数が多い学校にもなっている理由であろうと考えます。

こんな言葉があります。「伝統を壊そうとする人がいるから、伝統は続く」

「伝統的」と言われるお店や会社は、こだわりを大切に貫きます。しかし、そのほかの面では時代に合わせて柔軟に変化していることが多く、それが、時代を超えて長く愛される理由であるかもしれません。先ほど話したように、時代が大きく変化していく中で、時代に合わせて「壊している」こともある反面、こだわりを大切にしているからこそ、伝統が繋がっていく、私は、その流れを、蟻ヶ崎高校に強く感じています。

音楽の教員である私が特に伝えたいことは、「美しいこと、時間、もの、事象に、心寄せること」を大切にしてほしい ことです。今、この瞬間もそうですが、繋がっていく伝統という、流れていく時間の中に、皆さん 1 人 1 人が存在している ということを、ぜひ心に留めて日々いろんな目や、いろんな感覚を持ち、美しいものを求め探究しながら、過ごしてほしいと期待しています。

あと一週間で、令和 7 年度がやってきます。今年度は、私の大好きな詩人 新川和江さん、谷川俊太郎さん といった方がこの世を去られました。谷川俊太郎さんの詩に、「春に」というものがあります。「この気持ちはなんだろう この気持ちはなんだろう ぼくの腹へ 胸へ そしてのどへ 声にならない叫びとなって こみ上げる この気持ちはなんだろう 」春を迎える というのは、素直にこんな気持ちかもしれませんね。今年度を振り返り、新しい春を待ちわびながら、心躍る 4 月が迎えられるよう、しっかり準備をし、4 月 4 日の始業式に、元気でお会いしましょう。